

と食事が少ない。達成するためにただ一生懸命働くしかなかった。木材の伐採、ハツパの穴掘りで、腹が減って十分働くこともできず悲しい思いで過ごした。体力がオカになって数カ月、身体検査は尻の肉をつまんで診断された。オカは軽作業となった。

衣服は着の身着のまま、支給されるもの以外手に入らないから、休みの間は衣服の修理で一日を過ごした。食事は一回の量が少ないのでいつも空腹で、三年間で米飯は一度も食べたことがない。

スープに少量の野菜と魚肉が若干あるだけ、野のキノコ、ワラビ、野イチゴ等何でも食べた。

家は木造づくりで窓が少なく電気もなかった。

屋根板を燃やして明かりをとった。ペーチカで暖をとる。畳一枚くらの所に一人半ぐらいで寝た。

教育は「日本新聞」により共産党教育をされた。民主化されたような態度をとって、早くダモイに結びつけるように心がけた。

「生きて帰国」の一心で過ごした。タバコの配給品は戦友とパンを交換した。

帰還の時は骨折で入院、ナホトカまでは病院から列車で、病院船「高砂丸」であった。

舞鶴港上陸、昭和二十二年十月二十日。

## 抑留記

長野県 小平 計治

長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪で出生。

中箕輪村尋常高等小学校高等科卒業、中箕輪青年学校卒業後、農業を手伝う。

昭和十八（一九四三）年八月に徴兵検査にて甲種合格。昭和十九年一月十日に群馬県高崎市三八連隊に入隊。一月二十五日、博多港出航。二十六日、釜山港上陸。二十八日、河北省廊坊に着。北支派遣軍陣第四二八六部隊二五大隊機関銃中隊に転属。新安鎮付近警備に当たりながら、一期の検

閱を終わる。その後各地の討伐戦に参加。十九年五月十日、河南作戦に参加、洛陽攻撃に当たる。作戦終了後十九年六月、塚県から大王店方面の警備に当たる。

二十年八月、関東軍に移動する。八月十五日終戦、奉天（瀋陽）にて武装解除。ソ連軍に見守られながら約一カ月後、黒河より舟で対岸のソ連ブラゴエシチェンスクの街に渡る。ブラゴエシチェンスクより鉄道をシベリア本線のチタまで行く。チタからシベリア本線を一路モクスワ方面に向かう。途中、バイカル湖畔を約一日くらい走りイルクーツクの都市に入る。約三〇キロほど走った所で止まり、着いた所は北のチェレンホーボの街、そこで下車。ソ連軍に付き添われながらチェレンホーボの第二収容所に入る。収容人員約二千人ぐらい。作業はウーゴリスクラード炭坑でした。労働時間八時間で、炭坑の幅は長さ二千メートル、高さ約十五メートルくらいの露天掘りでした。ハツパをかけながら大スコでコンペヤーに載せ荷

車に載せる作業でした。冬になると零下五〇度以下になり、作業については日本人は零下四〇度ぐらいになると作業は中止になる。ノルマについては七〇%を目標とする。一〇〇%以上になると休みをくれることもあった。また、有志十五人で話し合いをし、青年行動隊を作り作業に行き、八〇%から一〇〇%を達成した。健康管理については月に一回くらい健康診断を行う。食事は一回に黒パンとスープぐらいで、時には黒ビールの差し入れもあった。

帰還については、作業より収容所に戻った時に知らせがあつて、青年行動隊の皆さんは何日も一〇〇%達成したので、明日日本に帰れるとの話があり、次の日の夕方、イルクーツク、チェレンホーボを後にしてナホトカに向かい、ナホトカで下車をし、そこで十日間共産主義の教育を受け、ナホトカで乗船、舞鶴に向かう。

長い抑留生活も二十三年五月三十日で終わり。その抑留生活の間に共に苦勞してきた同志がどの

くらい亡くなったことが、言いようもありません。

二十三年五月三十日、舞鶴上陸、復員。

## 抑留記

長野県 黒川隆佐

大正十二（一九二三）年二月二日、飯島町本郷に生まれる。家族は両親と、兄弟男二人女五人の七人で、農業をやっていた。高等小学校卒業後、農業、ナシを作る。

昭和十九（一九四四）年一月十日、現役兵として高崎の東部三八連隊に入隊、毎日軍事訓練。高崎の観音様へよく駆け足で行く。一月二十九日夜ひそかに軍用列車で高崎を出発、九州博多港より乗船する。雨の降る中、帰還兵と交代に船に乗り込む。朝鮮釜山上陸、列車にて満州より北支へ。

まず廊坊で体力検査、各中隊へ分かれてそれぞれ

中隊の駐屯地へ向かう。三中隊は廊坊で初年兵教育をする。約三カ月で切り上げる。歩兵中隊で豊田中隊長であった。教育が終わると私は豊台へ。そこは北支派遣軍の六三師団司令部があり、司令部付で当番をやる。

河南作戦が始まり師団はがらあきであった。六月、河南作戦は終わりを告げ、八月より九月にかけて部隊は帰って来る。陣第四二八六部隊（独立歩兵二五大隊）は辰県へ集結、私は中隊の本部付になる。

二十年三月ごろより北京地区を警備していた六三師団は満州へ移動。朝鮮を通り九州へ、沖繩へ行く計画であったが変更して通遼に集結。そのころ（六月ごろ）既にソ連参戦の予想があった。北京地区から部隊が引き揚げて手薄になり残留部隊がやられたので、それを追いつ返すために六三師団が出動作戦に満州の国境を越え北支へ入る。六月ごろであった。作戦を終え満州へ帰る。中隊は満州奉天（瀋陽）の糧秣廠に入る。奉天で終戦、武